

「基調講演を受けてダンス教育につなぐ」

永田 佳之 (聖心女子大学)

貫 成人 (専修大学)

村田 芳子 (司会・平成国際大学)

【村田】 基調講演をいただきました聖心女子大学の永田先生にも再び登壇していただきました。そして、舞踊学会の論客でもある貫先生に鼎談に加わっていただき、村田が司会を兼ねてこの鼎談を進行させていただきます。

講演の最後に永田先生から我々に大きな問いが投げかけられました。我々はこれをどう受け止め、何をやめるべきか残すべきか。新たに創るべきものは何か、それぞれ考えてみましょう。

まず、貫先生。ただいまのお話をお聞きして改めてこれ面白かったとか、感じたことがありましたらお願いします。

【貫】 全人類にも、教育現場の私たちにも関わる、大変、重要かつ複雑なお話を非常にコンパクトに、分かりやすく、面白く、熱意を込めてお話いただき、ありがとうございます。詩の朗読やささまざまなアート作品など、感動までいただきました。

舞踊との繋がりで補わせていただきますと、大小島真木さんの作品が装置として用いられた『ククノチ テクテク 真夏の冒険』は、今年の8月、横浜のKAATで行われた北村明子さんの作品です。北村さんは、文化庁の助成金で、中央アジアやアイルランド、インドネシアなどを取材し、その土地に伝承された、単なる身体技法ではなく、土の臭いや歴史、価値、神話などつながりのある身体をもとに作品を創っていらっしゃいます。永田先生からお話いただいた、舞踊における「人間を超えたもの」との関係性を作品として表現した一例かと思えます。

ギリシャ出身の振付家、ディミトリス・パパイオアナヌーの最近作も同様です。ミノタウロスや聖母子など神話や宗教のイメージとともに、人間がなぜ生まれてきたのか、人間は自然の一部に過ぎないのではないか、など、人間を超えた世界、宇宙との関係が表現されました。

今日午前中、第1会場で追手門高校の福岡先生の発表がありました。ダンス未経験の高校生を対象とした授業です。例えば、2人が並んでタオルを持ち合い、相手を支え、支えられながら、歩いたり、もたれたり、相手に乗っかる、など、1人ではできない動きが生まれます。それは振り付けたものではなく、ただ設定を決めただけなのに、

子どもたちはみんな違う動きをしてしまう。他人の体というものに気が付き、それによって自分に気が付く。しかも新しい踊りが生まれる。「振付」や「作家」といった近代的観念を超えたやり方で、永田先生がお話くださったESDの考え方とつながるものがあるように思いました。

【村田】 ありがとうございます。講演をお聞きして、やっぱりポスト人間主義というか、<人間ならざるもの>人間の力では及ばないものとの関係を取り込んでいくことは、「ダンスはもともとそうだったじゃないか」。人間の力じゃないところで祈って踊っていたし、アイヌの舞踊なんかは動物を模倣してもう一体になっていたし。その<人間ならざるもの>というのが舞踊や芸術の分野はすごく大事にしてきたと改めて思いました。でもそれは果たして教育っていう場に合うのかしらって。日本の教育の場では、やっと教師中心から人間(子ども)中心になってきた。先ほどの「蚊取り線香」の図でいうと何かもう何周か遅れている感じで、「やっとここまで来たのに、えっ、また人間中心じゃないの」みたいな追いつけないみたいな感じもあります。

それと貫先生から出た、人とのコンタクトも即興的にどンドン生み出すという人との関係性迎りもダンス教育で何か生かされそうと思いました。永田先生、その迎りいかがでしょう。もういきなり結構大きな問題だったんですけど、<人間ならざるもの>とダンス。<人間ならざるもの>を教育に取り込むということへの不安。まずは永田先生、切り込みます。

【永田】 僕は皆さんの学会の紀要を読み始めたら止まりませんでした。すごく刺激的で。なぜそんなに刺激的だったのかなって考えると、常に僕の頭の片隅にあった地球規模の課題からくる何か和らぎ、少し楽になってきたっていうか、希望が見いだせるようになってきたという感覚が多分あったと思うんです。

持続可能な未来を目指して教育研究をやっているんですけど、何かその基盤って人間のものすごい柔らかな感性とか身体性にあると思えるようになったんです。

さっきの蚊取り線香の図で人間中心にやってき

たところ、それがまだもっと先に行かなくちゃいけないなど。未だに右肩上がりの経済志向が強い社会です。現在の首相は「新しい資本主義」という言葉を使っていますし、昨日新聞を開くと大きな広告でグリーンエコノミーのシンポジウムが行われる。資本主義は気候変動をはじめいろんな問題をもたらしていますから、そこから抜け出してグリーンエコノミーにしよう。でもそれってまだ経済成長を狙っているという意味では、成長思考から抜け切れていないんです。

ところが先ほど皆さんと共有したように、世界は脱成長のほうに行っているんです。資本主義という言葉がまだ政治の舞台で出るといことは、僕は周回遅れを感じてしまいます。

同じように教育も教師中心じゃ駄目だ、知識中心じゃ駄目だと言って、知識だけじゃなくて全人的なホリスティックな教育をしてきました。人間中心、子ども中心主義に大人中心からシフトしてきました。だけれども子どもってこの世界のOne of them。人間自体が自然だし、人間は自然の一部なんだというところにかなくちゃいけないという認識が世界的に共有されています。教育学が追い付いていないと思います。20世紀が子どもの世紀であると、エレン・ケイが言って以来、児童中心主義が理想だったのです。

私は教育からいったん離れて、日本ならではの可能性、例えば、宮崎駿の描いたトトロとかナウシカとか、こういう感性というのは世界になかなかないらしく、これは何なのかも探究したいんです。逆にそういう感性を素直に受け入れられる若い人たちがこの国にはいるとすれば、これはものすごいポテンシャルだと思うんです。何かここで世界に共有してもらえるような世界観を実際に共有できないだろうかと思ってしまうぐらいです。

こんなしょうもない世界を大人達は作っちゃったけど、好き勝手なことをやりすぎたので自然がリベンジしてきている。確かにそうだけれども絶望的かという、若い人の感性とかを見ると捨てたもんじゃないと僕は思っています。

【村田】面白いですね。いかがですか。あの感性、ジブリの感性は世界にはないというお話。

【貫】同感です。ジブリの感性は、従来、「アニミズム」と言われますが、これは、欧米の宗教関係者からすると、軽蔑的でしかありません。キリスト教こそがちゃんとした「宗教」であり、アニミズムは「原始宗教」だというわけです。それが、ジブリによって評価が変わりつつあります。

思えば、アイヌの古式舞踊も動物の真似をします。申楽や能など、日本の伝統芸能も、世阿弥が言うように大元は動物の真似から始まっています。江戸時代には人形振り、人形の真似の舞踊がありました。

ジブリとかアニミズムも実は舞踊の源泉であり、そういうところからも舞踊教育の可能性があると思います。

【村田】何か常に人間中心ってそういうことじゃなくて、ダンスを創る時、全ての世界全体を見ながら創ることがあり、だからコロナが起きた時にやっぱり人間の力ではどうにもならない、超えたような世界はやっぱり表現のテーマとしても非常に面白いです。

例えば、『シンゴジラ』の映画を見ると、最後のシーン、凍結したゴジラのしっぽがぐーんとズームになっていって、その凍った透けたところに人間の姿とがれき、あれは核のゴミですけどね。それがサーッとズームになって終わる。『シンゴジラ』の世界ってすごいメッセージなんだ。人間の力を超えたものによる逆襲みたいな。それは表現のテーマとか、常に世界を感じて創っているというか。それは先ほど言われた小さな宇宙である身体を抱えている、身体って自分の身体でありながら誰もコントロールしきれない、中身は分からない。ダンスはその部分を常に抱えて、その細胞のレベルで興味を持って生きてきているのではないかと感じます。

【貫】永田先生は来年、オイリュトミーの公演をなさるそうですが、オイリュトミーはまさに身体のミクロコスモスとマクロコスモスのことです。

【村田】永田先生の基調講演、そしてそれを受けての鼎談でしたが、これまでの話を聞かれて、フロアの方で何か率直な感想やご意見などがありましたら是非よろしくお願ひします。

【フロア1】環境問題をどのように扱ってきたかに関しては、あまり頭の中に詰められてはいなかったです。ただ学生の創造的な表現の世界に自然というのは常にあるだろう。空を見たり月を見たり、木々のそよ風というものを体で表現したりすることがありますので、その自然とのつながりで表現が広がっていく可能性はあると思うけれど、今環境にどのような問題が起こっているかというところに関して、身体表現との関係性ってというのはあまりなかったかなと。

だけど今の時代、こういう時代だということ、足を足場に置いて、自分の身体性そして宇宙というつながりを考えていくことは、その人自身がどう自分の中から表現したいかにもつなげられるので、舞踊教育、身体教育の中にはこのような環境と自分。自分とその周りというもので表現の可能性が広がってくるかなという気はしました。

【村田】実は、今回の特別企画で初めてSDGsをテーマにとった時、最初は「それダンスと関係あるの？」と感じてしまったんですけど、もうほんとにここ避けては通れないし、ここにちゃんと向き合わないと何年後かに残ってないかもしれないと

いう危機感はすごく、教育すべきだなと感じています。

【貫】 環境との関係ということではピナ・バウシュが参考になると思います。ピナ・バウシュの作品では、自然の四つの基本要素、「四大」にあたる地水火風が出てきます。『カーネーション』では舞台上に土が敷き詰めてある。岩の上、水の中で踊る作品もあります。岩や土、水の上で踊ると、滑ったり足を取られたり転んだり、すごい負担がダンサーに掛かる。ダンサーは自然の中に存在し。自然に勝てないということです。それがリアルに舞踊で実践されます。

19世紀末、ドイツでダンスが生まれたきっかけは一種の環境問題でした。急激な近代化に異を唱える。そのとき頼りにされたのが、人間の自然な身体であり。裸体でした。環境問題とダンスの発生は非常に密接にあって、それがピナ・バウシュの場合は目に見えるかたちで表現されていると言えます。

【村田】 そうですね。その話を聞いていても一つ思うのは、いわゆる額縁舞踊っていうか舞台から外に出て、その場が舞踊を生むというか、月の下であったり、山の上であったり海辺であったりという、その場をすごく重要視していたという意味では自然の中で踊っていました。講演の中で石切場は、絶対ダンス的なイメージが浮かぶ。あの絵を見ただけで何か作品できそうな感じになるんです。

【フロア2】 高校生が作った作品で、森は泣いている風なのとか出してくるし、3.11の後には「それでもモクレンは・・・」という、がれきになったところでも生命は育つという作品があり、自分が生きることと掛け合わせて、次のあなたを育てるんですみたいな講評がされていました。創って終わりじゃなくって、それを創って問いかけてきたそれがそのあなたの未来につながるんだっていう話を思い出しました。

【フロア3】 環境問題に関して扱ってきてないんじゃないかってサイレントスプリングというようなテーマを扱った学生の作品はあるから、そこで彼らは考えて今の状況を自分たちが表現して、もっと未来を良くしたいという思いもあって作品を作りました。確かに環境問題に対峙した子どもたちはいました。だからそれを改めて考えていかなきゃいけない。

【フロア4】 先ほど貫先生からピナ・バウシュのお話がありましたので、ルドルフ・フォン・ラバンという、まさに舞踊教育の基本になってる方ですが、その方が当時環境問題と捉えられていたかどうか分かりませんが、19世紀後半から20世紀初頭に掛けていろいろと近代化していく過程で、かなり工業化された社会に対して、そのアン

チテーゼとして、まさに損なわれいく自然ですね。先ほど裸体文化という話が出ましたが、丸裸でほんとに湖畔でみんなで踊るということ始めて、その方がその理論的な根本、基本に備えていたのがまさに1番目の問いの<人間ならざるもの>です。

何かというと、結晶。結晶の中に流体結晶といって少し動くような。結晶っていうものから発想して、そこから体の動きというのを構成し、それを人間レベルの大きさにしたもので、母体が体の動きの方向を作るシステムを作っているところがありますので、もともとと舞踊教育の基本のところから最初の分が実はあったんじゃないかと思います。改めて考えていくと、現代の、その頃は気候変動とかはなかったと思いますけど、そういったことに対するヒントが与えられるのではないかなと思いました。

【村田】 基調講演での先生からの問いかけに対して、これまで話を膨らませていただきました。これらの問いにはほんとに答えが出ないんですけど、何をやるべきか何を残すべきか何を新たに創るべきかっていうのを本気で考えていくとすごく面白いなと思うので、ぜひ明日のシンポジウムにもきていただければと思います。シンポジストの一人である大橋先生、明日につなぐ一言をお願いします。

【大橋】 明日、発表できるかまだ分かりませんが、私がやっていることはほんとに目の前の1人の子どもの幸せを追求していくため、何をやるかっていうことですが、蚊取り線香の図のようなものを先生に提示していただいた時に、それが1人の子どもの幸せを考える時に、家族や地域の人たちとやっていうことでコミュニティになって、それがもう少し大きな輪になって、またそれが時間を超えて10年後、20年後とかにその子たちが大きくなった時にその地域に何が育っているかっていうふうに考えていくと、小さな営みではあるんですけど、少しそういうところにもつながっているのかなって勝手に夢を持って聞かせていただいておりました。ありがとうございます。

【村田】 蚊取り線香がもしかしたららせん状になっているのかもしれないですね。そう考えると何か創り出せそうな気がします。それでは最後に、永田先生、こうなってほしいとか、我々へのメッセージがありましたらお願いします。

【永田】 この会場におられる舞踊を専門とされているみなさんは、間違っていたら正していただきたいですけど、人をとてもしなやかにしたり、ほぐしたりするのが専門でいらっしゃる。それが必要な時代が来たのだと思います。

ユネスコからのリクエストを考えると皆さんが責任を負ってしまいかねない時代が来たという見方もできるかと思っています。

去年の「ユネスコ/日本ESD賞」を取ったのは、1つはアンデスの小さなシュタイナー学校でした。そこでは感性の学びが実現されています。アンデス山脈の村の学校です。そこで世界で一番豊かな教育が行われていた。ユネスコはそれを発掘したんです。

受賞スピーチで、校長先生がおっしゃったのが、私たちにとってコンドルは兄弟ですと。そんなスピーチをしたヨーロッパの人はいなかったんです。コンドルは兄弟って、どういうことだろうとみんな引き込まれました。でもそれはもう新しい時代が来たという象徴的なフレーズだったと思います。

演劇の人はものすごく早い。150年、200年という歴史がイギリス中心にあるという話は聞いたことがあって、いま人間中心にできた演劇学を捉え直しているそうです。今年の5月『バイオーム』という演劇を観たんですが、どの役者も人間と、あと木とか庭木とか花とかそういう人間と植物両方を演じているんですけど、日本人ってすごいなと思ったんです。そういう表現ができちゃうんだと。そういうところに可能性を感じます。

それを教育実践に落とした時に、さっきの追手門学校の、タオルを活かした実践に象徴される授業などが生まれやすくなるのかなと。環境問題を子どもたちに背負わせるというよりも、さっきの原理原則、ハーモニーの教育を具体化していただきたいなと思ってしまったんです。循環をどういうふうに表示するかとか、多様性をどのように表示するかとか、そうして初めて問題解決になっていくのかなと。最初に申し上げた持続可能な未来の基盤はしなやかな感性そして身体性がないと僕はできないと思っているんです。それを皆さんは時代がこうなっちゃったんで背負ってしまったのかなと。教育学の同胞として、皆さんに期待をしたと思いました。以上です。

【村田】最後にまとめていただきありがとうございます。それぞれ明日というか今日、大きな責任を背負っちゃったわけですので。皆さん覚悟して背負っていきましょう。多分、教育の問題だと思います。創造的にそういうことを瞬時に判断したり、体がちゃんとそういうふうになれる大人はそんなにいないとは思いますが、ぜひぜひ大いなる期待をして基調講演とその後の鼎談をこれで終わりたいと思います。皆様ありがとうございます。

<参考文献>

旭硝子財団（2022）第31回地球環境問題と人類の存続に関するアンケート調査報告書「環境危機時計」https://www.af-info.or.jp/ed_clock/assets/pdf/result/2022jresult_fulltext1.pdf（2023年9月15日参照）

Lloyd, Christopher（2023）『未来をつくるのはわ

た私たち：自然、人、地球をまもるおやくそく』山川出版社。（序：チャールズ3世、訳：永田佳之）

Burtynsky, Edward（2016）

Anthropocene Carrara Marble Quarries, Cava di Canalgrande #2, Carrara, Italy.

永田佳之（2019）「SDGs時代の学習論：持続可能な社会と存在をはぐくむ幼児教育」『発達』Vol. 40, No. 159, pp.77-82.

永田佳之（2020）「“ESD for 2030”を読み解く：『持続可能な開発のための教育』の真髄とは」『ESD』Vol. 3, No. 3, pp.5-17.

永田佳之（2022）「ポスト人間中心主義時代の保育を展望する：2050年へのリイマジネーション」『保育学研究』Vol. 60, No. 1, pp.201-208.

Dunne, Richard（2020）『ハーモニーの教育：ポスト・コロナ時代における世界の新たな見方と学び方』山川出版社。（監訳・監修：永田佳之）

UNESCO（2020）*Education for Sustainable Development: A Roadmap* <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374802>（2023年9月15日参照）

UNESCO（2021）*Reimagining Our Futures Together: A New Social Contract for Education* <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000379707>（2023年10月22日参照）